# 安部敏樹さん

◉一般社団法人リディラバ代表理事

## 社会問題の解決には、無関心を打破すること

「社会問題に対する無関心をなくす」というミッションのもと活動を続ける、一般社団法人リディラバ代表の安部敏樹さん。問題の解決には社会全体の意識を高めることが重要と、スタディツアーなどの事業を展開している。社会起業家の風雲児とも呼ばれ、現在も東大で教鞭を取りながら博士課程にも在籍している安部さんに、これまでの経緯や今後の展望を語ってもらった。

●聞き手……白井美樹（ライター）

**—社会の無関心を打破するというテーマを扱うようになったきっかけは？**

**安部**　僕は、中学時代に不登校になり、グレて横浜駅付近などで路上生活に近いような日々を送っていました。学校に行っているべき時間帯に、仲間と道端に座っていても、目の前を通り過ぎる大人たちは、僕らにまったく声をかけたりはしませんでした。そんな、社会全体の無関心って「嫌だな」と、その頃から感じていたのです。

**—でも、やがて東大に入学されましたね。**

**安部**　中・高時代は、勉強したいと思うような動機づけが見出せませんでした。中学はほとんど学校に通っていませんし、授業に出ても、「ウザイ先生がウザイ話をしている」くらいの感覚でしたね。なので、まったく学力がなくて、高校時代はいつも仮進級でしたし、成績は学年でビリでした。

でも、高3になった春に、ある転機が訪れました。当時『ドラゴン桜』という漫画が流行っていて、そのストーリーのごとく、落ちこぼれだった僕を東大に合格させようというプロジェクトを同級生たちが立ち上げてくれたのです。久々に周りから関心を持たれたことがうれしくて、期待に応えるために必死で勉強するようになりました。

**—東大に入学して、まずどんなことをされましたか。**

**安部**　ドラゴン桜は入学までは導いてくれましたが、入学後のことは教えてくれていませんでした。そこで、今度は『ワンピース』を読んで、「海賊王になろう！」と思ったわけです。具体的には、オーストラリアやギリシャでマグロを漁る仕事をしていました。海に潜って、素手でマグロを捕まえていたのです。

**—リディラバを創設したのも大学時代ですよね。**

**安部**　大学1、2年のときから、社会問題の現場を見て歩くことをしていました。僕の師匠の一人に、社会派弁護士として有名な川人博さんという方がいて、いろいろな現場に連れていってくれたのです。例えば、医療現場に当直して、仕事の負荷の大きさを体験したり、ホームレスのための炊き出しに出掛けたり、米軍基地に入ったりもしました。

**—さまざまな現場を見て、どんなことが分かったのでしょう。**

**安部**　まず思ったのは、社会問題の現場に悪人はいないということです。誰か悪い人がいて問題を起こすというシンプルなモデルはほとんどない。たいていの場合が、社会システムの間でこぼれおちてしまった人が問題の当事者になっていくという図式がありました。そして、そこには社会の無関心の構造が確かに存在していたのです。

そして、どの現場を見ても、構造的に解決していこうとする人が誰もいませんでした。そこで、少し自分でやれることから始めてみようかなと思ったわけです。

**—解決に必要なこととは？**

**安部**　社会問題には3つの壁が立ちはだかっていると考えています。1つめは、そ

### Profile

●あべ・としき●

1987年生まれ。東京大学在学中にマグロ漁師を経て、2009年『リディラバ』を設立。社会問題の現場を訪れる「スタディーツアー」の提供、地方創生活動などを行う。東京大学教養学部にて社会起業の授業も担当。第2回若者旅行を応援する取組表彰にて観光庁長官賞（最優秀賞）受賞など受賞多数。

もそも社会問題に関心が向いていないこと。2つめは、社会問題がどんなことかが可視化されていないこと。3つめは、社会問題が認識されていても解決へのアクションに結びついていないこと。この3つの壁を打ち破らないと、問題は解決できないと思いました。そのために、リディラバで、スタディツアーやメディア事業を立ち上げてきたわけです。

**—ツアーにはどんなものがあるのですか。**

**安部**　一次産業・地域振興から、アート、性教育、防衛問題まで幅広い社会問題を題材にしたスタディツアーがあり、現在では200～250のツアーを企画・運営しています。リディラバ創設当時にまず行ったのが、ダムの見学ツアーでした。ダムは結構、社会問題としての側面を多面的に抱えているんですね。地域と国の関係性、環境被害、住民の意識、河川法の問題など。こうした問題を分かりやすくまとめたツアーを作ったのです。もちろん、最初からダムに興味がある人などいないので、紅葉狩りや温泉などの要素も入れ込みましたけれどね（笑）。

**—スタディツアーを行う意義とは？**

**安部**　先ほどお話しした、社会問題解決への3つの壁を取り払い、問題を共有するための架け橋をつくることができると思っています。

　問題に関わっている人は、自分たちでそれを問題として認識している場合も、そうでない場合もあります。いずれにしても、当事者だけでなく、第3者が関わっていかないと解決できないことはみんな理解しているのです。第3者が現場に行くことで、問題に対する啓発活動になるし、データベースから次のステップへ進むようなビジネスモデルも生まれてきます。

　また、いちばん大事なことは、第3者に見られることで、当事者の意識が変わるということです。例えば、障害者だけ、ホームレスだけで暮らしていると、社会とつながっているという意識がどんどん薄れていきます。でも、第3者が関心を持ってくれたことで、障害者の方の就労支援施設での働き方が翌日から変わったという例も見られます。もちろん、現場を訪れたツアー参加者の意識も変わるでしょう。この両者が変わることに意味があります。

　ところで、そもそも「関心」とは何だと思われますか？

**—関心ですか？ ちょっと難しいですね。**

**安部**　関心とは、単純に時間です。有限の時間の中で、どれだけ注意を払っているかということになります。

　例えば、毎日新聞を読んで15分しか社会問題を考えていない人がいたとします。その15分を150分にしてもいいのではないかというのが僕の考え方です。

　それには、もともとの人の時間の使い方に入り込む必要がある。修学旅行や企業の事業開発などの時間をもらって、そこに社会問題に向き合う時間を設けてもらうのです。そうして、みんなの社会問題への関心を高めることで、解決のスピードが早まっていくでしょう。

**—いかに社会問題に対して関心をもつ時間を増やすかが大切なのですね。**

**安部**　社会問題には、理解や合意形成が難しい側面があります。「あなたにとっては問題だけど、私にとっては問題ではない」という場合だってあるでしょう。でも、1人の感情でものを言っても解決にならないので、少しずつ共通言語をすり合わせていくプロセスが重要です。われわれがやっていることは、みんなで共通体験をし、共通言語にしていき、建設的に話し合っていきましょうというプロセスをつくる仕事だと思っています。

**—地域振興のツアーもやっていますよね。**

**安部**　そうですね、自治体との仕事も多いですね。ツアーの参加者には、過疎地域に実際に移住した人も多いんですよ。

　移住者を募るときに大切なのは、「気候がよくて自然がきれいで……」なんていう土地の良さを宣伝することではなく、その地域の課題を提示して、解決したい人に来てもらうことです。すると、都会にいるよりも自分が挑戦できそうな課題があるから、自分の相対的なインパクトを高められるのではと考えるようになります。これまでも、そういうところに喜びを感じて移住した若者が多かったですね。

　地域の問題に関しては、やはりコーディネーター的な人が重要になる。保健師さんとも共同でできることがあれば、ぜひ一緒に取り組んでいきたいですね。

**—今後の活動予定は？**

**安部**　これまでの事業に加えて、新しいジャーナリズムを作りたいと思っています。既存のメディア関係者は、個人のストーリーばかり伝えることが多くて、どうしてその社会問題が起こるのだろうという構造的な説明をあまりしてきませんでした。そこで、おのずと問題の本質が見えてくるような「リディラバジャーナル」というメディアを今企画中です。どういうものかというと、まず社会問題の現場を取材し、その内容について、社内で構造化会議を開きます。構造化会議は、社会問題を断片的に捉えるのではなく、その裏にある問題点を探り、本質を見極め、更なる取材の方針を決めていくものです。その内容を「リディラバジャーナル」に提供していくつもりです。期待していてください。

リディラバの仲間たちと